

PAC 分析を用いた韓国人母親の 「育児ネットワーク」に関する事例研究

Case study about “Child-Rearing Network” of Korean mothers by PAC analysis

金 娟 鏡
Yeonkyeong KIM

概要

本研究は、韓国人母親を対象に PAC 分析を行い、「育児ネットワーク」の機能について検討したものである。4 人の事例を分析した結果、日本人母親を対象にした金（2007a）と同様に、支援機能のほかに、規範機能および比較機能が、通文化的に存在することが実証された。また、「育児ネットワーク」の機能のうち、規範機能と比較機能は母親役割行動の「早期教育への働きかけ」に関連していた。これらの結果は、韓国社会の学歴や発達期待をめぐる文化的価値づけが、「育児ネットワーク」の機能と母親役割行動をつなぐ過程で開示されたものと考えられる。

キーワード：育児ネットワーク、支援機能、規範機能、比較機能、PAC 分析、韓国人母親

Abstract

This study conducted PAC analysis for Korean mothers and examined the function of a “Child-Rearing Network”. The results of four cases demonstrated there were not only supportive but also normative and comparative functions as shown in the previous study by Kim (2007a) for Japanese mothers; the functions existed over the cultural differences between Korea and Japan. The normative and comparative functions of “Child-Rearing Network” were related mainly to “an approach to early education” among the role behaviors as mother. It is considered that these results disclosed “how educational status and growth expectation are culturally valued in the society of Korea” in the process of connecting the functions of Child-Rearing Network with role behaviors as mother.

Keywords: Child-rearing Network, supportive functions, normative functions, comparative functions, PAC (Personal Attitude Construct) analysis, Korean mothers

目次

1. 問題と目的
2. 方法
 - 2.1 調査対象者
 - 2.2 調査時期
 - 2.3 手続き
3. 結果と考察
 - 3.1 対象者 A
 - 3.2 対象者 B
 - 3.3 対象者 C
 - 3.4 対象者 D
4. 総合的考察

1. 問題と目的

地域共同体の喪失・希薄化に伴い、母親が一人で育児を抱え込む孤立した状況に陥っているとの見解が長らく一般的であった。ところが、育児期の母親の実態調査を行った落合（1989）は、母親を取り巻く夫、子どもの祖父母、近所の人といった様々な人々の「ネットワーク」が、育児に関与していることを指摘している。

金（2011）は、育児期の母親とその母親を取り巻く人々との関わりを「育児ネットワーク」と定義し、育児ネットワークについて、文化的影響を踏まえて検討することを目指した。そのため、日本と文化の異なる国とを比較することで、それぞれの文化の特徴を相対化できると考えた。これまで日本と他の国との比較については、アジアの国との比較はまだ数少なく、欧米との比較が多い（陳・高橋，1988）が、「東洋」と「西洋」の対極的な二分法では、社会環境の差異のみが強調され、文化的特徴を十分に吟味できない。こうした理由から、塘・木村（2000）、永久（2010）は日本と同じアジアの隣接した国とを比較する必要性を論じている。

塘・木村（2000）、永久（2010）の指摘を受け、金（2011）は日本との比較対象国として韓国を取り上げ、育児期の日韓の母親を対象に、育児ネットワークを構成する人々を検討した。自由記述法を用いた調査の結果、育児ネットワークの構成員として、日韓に共通して、「夫」「自分の親」「夫の親」「園の先生」「園の母親」「（学生時代からの）友人」「近所の人」「親せき」が得られた。一方で、日本では「（学生時代からの）友人」よりも「園の母親」が、韓国では「園の母親」よりも「（学生時代からの）友人」が、育児ネットワークの構成員として重要な位置を占めているという相違も明らかになった。

また、金（2007a）は、育児ネットワークが母親の行動や意識にどのように働きかけるかという育児ネットワークの機能について、日本人母親を対象に PAC（Personal Attitude Construct）分析（内藤，1997，2002）を用いて検討した。PAC 分析は、1）当該テーマに対する自由連想、2）連想反応項目間の類似度評定（7 段階）、3）類似度距離行列によるクラスター分析、4）対象者によるクラスター構造の意味づけ、5）調査者による解釈を通して個別の事例を分析する技法である。PAC 分析を用いることで、たとえ少数事例であっても、対象者の内面を全体的に捉え、対象者を類型化することが可能となる。そこで、日本人母親を対象に PAC 分析を行った結果、母親を取り巻く育児ネットワークは、従来の多くの研究で指摘されてきた母親に情緒的・道具的支援を提供する「支援機能」のほかに、当該文化において望ましいとされる母親役割を期待する「規範機能」や、母親役割を評価する際の比較の準拠枠をもたらす「比較機能」を有することを新たに実証できた。

しかしながら、金（2007a）では日本人母親のみを対象にしていたため、育児ネットワークの 3 つの機能が、日本人母親に独自にみられるものなのか、それとも他の文化にも共通するものなのかがわからない。そこで本研究は、韓国人母親を対象に PAC 分析を行い、金（2007a）で得られた日本人母親の結果と照らし合わせて、韓国人母親を取り巻く育児ネットワークの機能の詳細を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象者

韓国の P 市内にある幼稚園を通して、調査の趣旨と協力を依頼する文章を配布し、対象者の募集をした。調査に協力可能と回答した方には後日改めて連絡を取り、調査日程を決めた。調査対象者は、以下の通りであった（Table 1）。

Table 1 対象者の属性

対象者	年齢	学歴	就業形態	子ども数	家族形態
A	32 歳	専門大卒（*）	専業主婦	2 人（5 歳男児、4 歳女児）	核家族
B	34 歳	高校卒	専業主婦	3 人（7 歳女児、4 歳女児、2 歳女児）	核家族
C	38 歳	大学卒	専業主婦	2 人（12 歳女児、5 歳女児）	核家族
D	38 歳	大学卒	パートタイム	2 人（8 歳男児、5 歳女児）	核家族

（*）日本の短大に該当する

2.2 調査時期

調査は、2004 年 1 月から 2 月までの間に、対象者の自宅で実施した。一人当たりの調査時間は、1 時間 30 分～2 時間であった。

2.3 手続き

2.3.1 調査内容

対象者に、プライバシーの保護を厳守することを伝えるとともに、匿名での研究発表について説明した。学術大会や学術雑誌での発表についての諾否を尋ねたところ、対象者全員から承諾を得ることができ、誓約書を交わした。ついで、PAC 分析の実施手順について説明し、下記の連想刺激文を提示するとともに、口頭で読み上げた。

「母親とは、子どもに対してどのような役割をするものだと思いますか。あなたは母親としての自分をどう思いますか。また、母親としての自分を思う際に、周りの人々は、誰が、どのように関わってきますか。具体的に、どんなところからそのように思いますか。そして、そのことからどんな感情が生じるのでしょうか。日頃の母親としての自分を振り返って、頭に浮かんできたイメージや言葉をカードにご記入ください」

2.3.2 PAC 分析の実施

【セクション 1】対象者に、記入用のカード（おおよそ 3cm × 9cm）を 20 枚程度渡し、浮かんできた順に、自由に記入してもらった。連想が途切れた場合は、再び連想刺激文を読み上げ、「もっと浮かんできませんか？」「他にはありませんか？」と尋ね、連想を促した。連想が浮かばなくなった後、カードを重要だと感じられる順に並べ替えさせて、重要順位を記入させた。つぎに、連想項目間の類似度距離行列を作成するために、すべてのカードをランダムに 2 枚ずつ提示し、直感的なイメージの上で、どの程度類似しているのかを、「非常に近い」(1) から「非常に遠い」(7) までの 7 段階尺度で回答させた。

【セクション 2】約 15 分の休憩時間中に、調査者（筆者）は類似度距離行列を用いて、Ward 法によるクラスター分析を行い、析出されたデンドログラムを 2 枚プリントアウトし、余白部分に連想項目を書き入れた。そのうち 1 枚を対象者に渡し、もう 1 枚は調査者（筆者）が見ながら、デンドログラムの結果について、対象者のイメージを聞いた。具体的には、調査者（筆者）が解釈できそうなクラスターごとに、クラスターを構成する項目を読み上げ、項目全体に共通するイメージや意味づけ、それぞれの項目が併合された理由として感じられるものについて尋ねた。ついで、第 1 クラスターと第 2 クラスター、第 2 クラスターと第 3 クラスターのように、各クラスター間の比較やデンドログラム全体のイメージや意味づけについて聞いた。最後に、それぞれの連想項目について、単独でのイメージがプラス（+）、どちらでもない（0）、マイナス（-）のいずれに該当するかの回答を求めた。その他に、調査者（筆者）にとって解釈しにくい項目を取り上げ、項目ごとにそのイメージを補足的に質問した。

なお、対象者の語りは、対象者の許可を得てテープレコーダーに録音し、逐語録を作成

した。逐語録の作成は、調査者（著者）が韓国語で作成した後、日本語に訳した。

3. 結果と考察

4 人の対象者による連想項目および各クラスターの意味づけは、以下のようになった。

3.1 対象者 A

連想された 9 項目の単独イメージをみると、プラスが 5 項目、マイナスがなく、ゼロが 4 項目であることから、肯定的なイメージが強く、葛藤を感じることはないが、自己を対象化し、疎隔的に捉える傾向のあることがうかがえる（Figure 1 の（ ）内の符号参照）。



Figure 1 対象者 A のデンドログラム（左の数字は重要度順位）

3.1.1 対象者 A による意味づけ

クラスター 1「やさしい母親 (+)」～「あなただけを信じる (+)」について：普段子どもたちにやっていることなんですけど、夫や夫の親が求める、子どもにとってどういう母親であってほしいという母親像、そんなことですかね。子どもたちに本を読んであげることとか、まだ幼いんで、着替えを手伝ってあげることとかは必要ですけど……、冷静に考えると自分たちで十分にできることなんですけどね（笑い）。とくに、本を読んであげるとは、以前はよく読んであげたんですが、最近はあまりやっていません（笑い）。

でも、夫の親は、子どもへの愛は「ネリサラン（注：親から子へ、子から孫へ向かう愛の流れという意味）」というんですよね。孫たちをととても可愛がってくれていますけど。親せきには、いい大学を出て、マスコミに出られた方もいまして、そんな感じで……なんかそういうのを孫たちに望んでいるようなんですけどね（笑い）。親としては、そういう立派な人に

なってくれると嬉しいけど、どんな分野を選ぼうとも、何をやろうとも、人から悪口を言われないで、元気で育ってほしいと思いますね……。

夫や夫の親とは合わない感じがありましたね。夫とは育ってきた環境が違いますし、価値観が違いますから、そこでぶつかる葛藤みたいなものがあつたんです。お互いのことが理解できないから憎んだりしましたけど（笑い）、私たちは家族なんだと、自分に言い聞かせましたね。

クラスター2「先生の役割(0)」～「料理人の役割(0)」について：子どもたちを育てながら、うーん、私自身もとても重要だと思うことなんです。先生としてとか、料理人としてとか、母親役割にはそういうのもあって、もっとうまくできればいいなあと思うんですけどね。うちは、夫がとても味にうるさい人なんです。私は何でも食べられるタイプではないから、食が細いんで、そういう部分は子どもたちも私に似ていて、あまり食べなかったりするんですね。美味しく作ると食べたりはしますけど、子どもたちが思ったほど食べないから、夫は料理人のように栄養たっぷりの立派な食事を求めてきます（笑い）。普段、家で食べている平凡なおかずではなく、家でもきちんとテーブルをセッティングして、ホームパーティのように（笑い）。でも、それを作ろうとすると、かなり時間がかかりますよね（笑い）。先生としても、ハングルとか、数字とか、ごく簡単な、基本的なことは私が（子どもに）教えたりしますが……夫は、子どもたちにもっといろいろ教えてあげてを求めているようで、がんばらないと（笑い）。

クラスター1と2の比較について：母親として子どもたちにすべきことっていう点では同じだと思いますが、違うところは、時と場合によっては、子どもが幼い頃は、下の方（クラスター2）のほうが大事だと思います。

全体について：うーん。自分でもそう思うところもありますが、周りから求められるからこうしなければと思うところもありますし、私が良き母親として子どもたちにすべきことですね。

補足質問

「やさしい母親(+)」について：子どもたちからすれば、自分の親だとしても、心のどこかではやっぱりちょっと憎かったりする部分もあるんじゃないですか。ですから、できるだけ子どもを傷つける言葉は言わないようにしていますし、それができると良いのですが……。頭ごなしに子どもに怒ったり、感情的になったりして、子どもを悲しませることはしたくありません。

「あなただけを信じる(+)」について：子どもが生まれた時に、夫の両親から言われたんですよ。その時は、強い責任を感じましたね（笑い）。重かったんですけど、今は、大丈夫です。母親として、しっかりとやっていきたいと思っています（笑い）。

3.1.2 対象者 A についての解釈

クラスター 1 では、「夫」や「夫の親」から、子どもたちの「着替えを手伝ってあげたり」「本を読んであげたり」といった細々とした世話を求められており、「あなただけを信じる」と言われた当初は、「強い責任」を感じ、「重く」受け止めていたが、今は自らも「母親としてしっかりとやっていきたい」と肯定的に語っている。その思いは、子どもに感情的に怒ったりしない「やさしい母親」を重要度順位 1 位として取り上げていることから裏づけられる。このような内容から、クラスター 1 は、《夫や夫の親からの期待と母親としての覚悟》と解釈した。

クラスター 2 では、自分に似て食の細い子どもたちのために、「夫」から「栄養たっぷり食事」を作り、健康管理に気遣うことや、「ハンゲルとか、数字とか」のほかに、もっと「いろいろ子どもに教える」ことを求められているが、これらは対象者 A 自身も、「子どもが幼い頃は大事」なことと思っており、淡々と「がんばらないと」と語っている。そこで、クラスター 2 は、《子どもの健康や認知発達への世話》と解釈した。

3.2 対象者 B

連想された 16 項目の単独イメージは、プラスが 12 項目、マイナスが 3 項目、ゼロが 1 項目であり、全体的に肯定的なイメージが強いことがうかがえる (Figure 2 の () 内の符号参照)。

3.2.1 対象者 B による意味づけ

クラスター 1 「より大きな愛 (+)」～「申し訳ない (+)」について：私って、子どもたちに冷たく接するほうだと思います。より大きな愛ってというのは、今すぐ何かをやってあげるよりも、他の子どもに比べて少し物足りない感じがあっても、色々な経験をさせたいと思っています。たとえば、子どもが躓いて倒れた時に、すぐに立ち上がらせてお薬を塗ってあげたりするのではなく、子どもが泣き出しても「自分で歩いてお母さんのところに来なさい」と言うと、子どもは歩いているうちに痛みを忘れてたりするんじゃないですか。それから痛かったんだろうねと慰めてあげると、躓いて倒れて痛くなっても、しばらくすると痛くなくなるんだなあ、っていうことを子どもが自ら感じる事ができるはずなのに、倒れたからといって、私がすぐに側に行き立させて慰めたりすると、子どもが自ら感じる前に、倒れたらお母さんが来てくれるんだ、とそういう風に考えてほしくありません。そういう点で、他のお母さんたちのように、無条件にやさしくしてあげないから、子どもたちに申し訳ないと思うところがあります。

うーん、母親に似ていくっていうのは、私の母も冷たいほうなんです。昔は（自分の）母のような育て方はしたくないと思っていたんですけど、でもこの頃の自分をみると、（自

分の) 母にそっくりになってきた気がするんですね。冷たいところも似ていますし、自分が親になってみると、母のやり方が正しかったって思うところがあって、そういうところは似ていく気がします。実家の父も、厳しかったんですね。記憶って、実家の母と父に対する記憶です。



Figure 2 対象者 B のデンドログラム (左の数字は重要度順位)

クラスター 2「平凡 (+)」～「早期教育 (-)」について：子どもが自分は特別な存在だと思わないで、平凡だと思ってほしいんです (笑い)。子どもにわざと「あまりかわいくない」と言ったりしたこともありましたがね (笑い)。

最近、子どもの教育問題が悩みの種です。2 歳から塾に行かせているご家庭もありますし、うちは 5 歳から行かせていますけど。私は早期教育も大事だけど、それよりもきょうだいの絆を先に感じてほしいと思っています。妹を守ってあげたり、お姉さんを慕ったりとか、そういうのを先に感じてほしいのに、周りはみんな (子どもを) 塾に行かせたりするんですから、公園に行っても友達がいらないんです……。

クラスター 1 と 2 の比較について：うーん、似ている部分は、子どもの発達には段階があるじゃないですか。おっぱいを飲ませる段階と、歩く段階とか。上の子 (第一子) の場合は、幼稚園で社会的生活をする段階ですから、私が感じる淋しさみたいなものは、子どもたちが巣立った後に実家の母親が感じた淋しさと、多少は似ていると思いますね。

全体について：大変そう (笑い)、そんな気がしますね。私って、平凡さの中で黒真珠

を探すというタイプだと思うんですよ。でもね、たとえば、子どもたちとスーパーに一緒に行って、「お母さん、これが食べたいよ」というと、それを買ってあげればいいのに、そうしないで「後で作ってあげるね」と言うから、子どもたちからすれば喜べないかもしれませんよね。大人になったら分かってもらえるかもしれませんが。昔、お母さんが何々を作ってくれたという、そういうのを一つは覚えていてほしいんですね（笑い）。

補足質問

「母性愛（+）」について：昔は、母性っていうと、自分を犠牲にしてすごく危機的な状況から子どもを救ったという、そんなイメージがありましたけど、近頃は、母性愛というと、子どもに早期教育をさせたり、お勉強のできる子どもに育てたりすることのようですが、私の場合はもっと、うーん……子どもたちにお勉強をたくさんさせるとかではなく、お母さんの温もりや優しさを感じてもらいたいですね。そんな基本的なことです。

「子どもの友人の母親（0）」について：同じ幼稚園の母親のことなんですけど、私はその母親が冷たいけど、本心では子どもに愛情を持って接している、私と似たようなタイプだなと思ったんですけどね。ところがある日、塾を3ヶ所も行かせていると聞いたら、私だけが遅れているんじゃないかって。私はその母親が、私と似たような考えを持っていると思い込んでいたのに、いつの間にか取り残された気がして、とても不安になったことがありましたね。

3.2.2 対象者 B についての解釈

対象者 B は、子どもが躓いて倒れた時も、子どもにすぐ手を貸すのではなく、「自分で歩いてお母さんのところに来なさい」と、子どもが自力で立ち上げられるように見守ってあげることが、長い目でみて子どものためになるし、「より大きな愛」だと思っている。自分が親になってみると、母のやり方が正しかったって思うところがあって、そういうところは「（自分の）母親」や「（自分の）父親」に似ていくとを感じるが、一方では、他のお母さんたちのように、無条件にやさしくしてあげないから、子どもたちに「申し訳ない」と思うところがあると感じている。そこで、クラスター 1 は《より大きな愛と不足する無条件のやさしさ》と解釈した。

クラスター 2 では、子どもが小さい頃は、親子、「きょうだいの絆」を深める体験を重視したいが、一見すると自分と似た育て方をする「子どもの友人の母親」さえもが早期教育へ駆り立てられているのを知って、うちの子だけが遅れてしまうのではないかと、「いつの間にか取り残された」と強い不安を覚えたことに言及している。クラスター 2 は、《早期教育への社会的雰囲気への淋しさ》と解釈した。

3.3 対象者 C

連想された 12 項目の単独イメージは、プラスが 5 項目、マイナスが 4 項目、ゼロが 3 項目であった。肯定的なイメージと否定的なイメージに加え、自己疎隔的なイメージもあり、アンビバレントなイメージを抱えていると推測される (Figure 3 の () 内の符号参照)。



Figure 3 対象者 C のデンドログラム (左の数字は重要度順位)

3.3.1 対象者 C による意味づけ

クラスター 1 「子どもが幸せになれるように支えていきたい (+)」～「いろいろ至らないところが多い (-)」について：うーん。どうすれば子どもが幸せになれるか、どう育てればいいかってことですね。他の母親のように一生懸命にお勉強させて、色んな塾に行かせるよりも、思いっきり遊ばせたほうが、子どもが幸せになれる気がしますけどね。でも、そんなに遊ばせているわけではありませんし、だからといって、一生懸命に何かを学ばせているわけでもありませんので、いつもそれで悩んでいる、といった内容だと思います。

うちは娘たちを育てているわけですから、がんばっている母親の姿を見せてあげたいんですけど……、ただ単に毎日进行している感じがして、ポジティブに言えば、「努力中」と言えますけど、本当はちゃんとできていないんじゃないかって……。なんか、周りの母親たちをみると、自ら運転して塾の送り迎えをする熱心な母親もいますし、あまりそういうのをやらない母親もいるじゃないですか。子どもの一日のスケジュールを組んであげる母親と、子どもに任せる母親がいるんですよね。ですから、そういうところで、私はどっち

にすればいいんだろうと、悩んでしまいます。子どもたちに完全に任せているわけでもなく、かといって、私がすべてを管理しているわけでもないの、そういうところも悩みますね……。母親として、至らないところが多い気がしますけどね（笑い）。

うーん、子どもの気持ちがわからなくて、悩んだりすること多いんですね。うちの子どもたちは、感情表現をはっきりしないほうなんです。もしかしたら、母親が感情表現できる環境を作ってあげなかったからじゃないかって、だから親の前で言うのを躊躇するんじゃないかって思うと、心が苦しくなりますね。とくに、下の子（第二子）の場合は、自分よりも小さい子どもから意地悪されても、何にも言い返せないみたいです。上の子と下の子は年が離れているので、下の子はわりと甘えさせましたね。でも、普通は甘えさせるとわがままになるはずなのに、うちの子は真反対ですね。あまりにも物静かというか、それで私の育て方が間違っているんじゃないかと思う時もあります。子どもが殴られてきた時なんかは、どう話せばいいのか悩んでしまいますね。お勉強に関連した悩みとは違うんですけど、子どものお友達付き合いも大事だと思うんです。殴られてきたというその事実だけをみると、自分の子どもが被害を被ったってことじゃないですか。その時は母親の私が積極的に関与したほうがいいのか、それともうちの子に、今度は殴られないように注意しなさいと言う程度に止めたほうがいいのか、そういう悩みですね。うーん、母親役割って悩みの連続ですよ（笑い）。

クラスター 2「親せき (0)」～「近所の人 (0)」について：親せきの子どもは 5 歳なんですけど、ネイティブに英語を習わせているんですって。そこまでさせられる子がいる反面、うちの子は幼稚園で習っている基礎的なこと以外は、英語がまったく分からない水準じゃないですか。何にも知らない子と、ネイティブに習っている子とでは……。ですから、そのことでまた真剣に悩んでいます（笑い）。なんか、最近は英語幼稚園（注：幼稚園での教育活動のすべてが英語のみで行われる）が流行っているんじゃないですか。そういうところに通っている子どもをみると、やっぱり英語が上手なんですよ。お勉強ができる基準も言ってみれば主観的なものじゃないんですか。でもね……。近所にも、子どもを英語幼稚園に通わせるご家庭がありまして、ですから、周りに比較の材料がたくさんあるわけなんです。本当に。いざ来年から小学校に上がると思うと、周囲のことが気になりましたね。

クラスター 1 と 2 の比較について：結局のところ、わが子をよく育てたいという親の欲から始まった話なんですけど、上（クラスター 1）も下（クラスター 2）もうまくいなくて悩んだり、苦しんだり、至らなかったり、そんな内容が書かれている気がしますね。

全体について：子どものためにはどうすればよいか、どんなに悩んでも結論は出ませんし、最終的には母親の私が決めることなんですけどね……。ですから、ずっと悩んでいて、結局お勉強をさせる方向に行っている気がしてなりませんけどね。この塾がいいのか、それ

ともあの塾がいいのか、塾の種類が多すぎて悩めますね（笑い）。

3.3.2 対象者Cについての解釈

対象者Cは、母親として「子どもが幸せになれるように支えていきたい」と考えている。そのためには、色んな塾に行かせるよりも、「思いっきり遊ばせた」ほうが良いと思うものの、早期教育に熱心な「周りの母親たち」をみると、自分は「ちゃんとしていない」中途半端な気がして、「どっちにすればいいんだろう」と悩んでしまう。また、年下の子に殴られても言い返せず、あまり感情表現をしない下の子の交友関係についても、母親として「積極的に関与したほうが良いか」、それとも「注意しなさいという程度に止めるほうが良いか」、子どもに「どう話せばいいか」といつも悩んでいて明確な方針を見いだせない。ただ単に毎日を過ごしている気がして、「本当はちゃんとできていないんじゃないか」と、母親としての自分には「至らないところが多い」のではと気にしている。そこで、クラスター1は《理想と現実の狭間での逡巡》であると解釈した。

クラスター2は、5歳の子にネイティブの英語を習わせている「親せき」、子どもを英語幼稚園に通わせる「近所の人」をみて、自分も子どもたちにネイティブの英語を習わせるべきか否かを「真剣に」悩んでいるという内容で、《英語（早期）教育に熱心な人々との比較による逡巡》と解釈した。

3.4 対象者D

連想された9項目のうち、プラスが8項目、マイナスがなく、ゼロが1項目であることから、全体的に肯定的なイメージが強いことがうかがえる（Figure 4の（ ）内の符号参照）



Figure 4 対象者Dのデンドログラム（左の数字は重要度順位）

3.4.1 対象者 D による意味づけ

クラスター 1「ラジオ (+)」～「助言 (+)」について：まずは、母親が自分の考えをもつことが大事だと思いますし、それから夫に聞いたりしますね。ほとんどは私が決めますが、大きな決断が必要な時は、子どもの父親（夫）に尋ねて決めますね……。

母親が一番の見本、鏡になるべきというのは、「三つ子の魂百まで」ということわざがあるんじゃないですか。本当に、子どもは親の背中を見て育ちますから。ですから、それなりに母親がしっかりしていて、子どもの見本になるべきだと思いますね。そのために、周りからの助言を大事にして、母親教室の講義も欠かさずに受けに行きます。あ、幼稚園の先生からも、いろいろ助言を得たりしますね。日々の食生活のこととか、子どもの性格に関することとか。

クラスター 2「子どもの交友関係（子どもの母親同士の関係も含めて）(0)」～「友人との会話 (+)」について：子どもの交友関係は、私自身の友人ではなく、子どもを通じて関わる母親たちのことです。うーん、私の友人には、心の奥底を見せることができますけど、子どもを通じて知り合った母親たちには、いい姿だけを見せるようにしていますし、一緒に笑う程度かなあ……。

他の母親たちは、お勉強のことを真っ先に聞いてきますね。そういう母親たちは、自分の考えがなく、みんながやるからって、子どもをあちらこちらの塾に行かせる母親たちだと思うんです。うちの子どもたちは本をたくさん読むほうです。漫画も含めて（笑い）。その影響か、周りの子に比べて物知りですから、他の母親たちはそれが気になるようです。「あの子は、どんな学習紙（注：子どもが一定の量を自宅で勉強できるように配布される通信教育教材のことである。なかでも、先生が定期的に家庭を訪問する「パルガンペン（赤ペン）」「クモン（公文）」などが人気を集めている）をやっていますか？」「どこの塾に行かせていますか？」「英語はやっていますか？」とか。でも、私はそういうタイプではありませんけどね……。

クラスター 1 と 2 の比較について：上（クラスター 1）は、助言を得たりしていますね。下（クラスター 2）は、友人と話したりして、やっぱり友人と話し合っているうちに共感を得ることが多いんですね。心の奥底の話というか……。子どもの友人の母親とはそこまでいきませんが（笑い）。

全体について：親としての日常生活かなあ……。うーん、子ども中心の私の日常が明らかになった気がしますね。結局、自分の子どもですから、周りから助言をいただいたりしますが、最終的には母親が責任を取らなければならないんじゃないですか。子どもたちのために、最善を尽くすことを目標としています（笑い）。

補足質問

「ラジオ (+)」について：テレビは見ないので、その代わり、ラジオを通して色んな情

報を得ていますね。

「母親教室の講義（＋）」について：時々、幼稚園の母親教室で開かれる講義を受けたりします。そこで話を聞いてみると、何よりも大事なのは、子どもが自ら学ぶことだそうですね。塾に行かせて、詰め込み教育ばかりさせてはいけないんだとか。母親自身がそういうことをちゃんと知っておけば、そういったアウトラインの中で、子どもを導くことができると感じましたね。

3.4.2 対象者 D についての解釈

対象者 D は、子どもは親の背中を見て育ち、いつも母親が一番の見本となるべきと考えている。そのためにも母親は自分の考えをもつことが大事で、欠かさずに行く「母親教室の講義」「幼稚園の先生」など、周りの人々から「助言」を得ている。そして、「ほとんどは私が決めますが、大きな決断が必要な時は、『夫』に尋ねて決める」と述べ、子どもたちのために、最善を尽くすことを目標としていると語っている。そこでクラスター 1 は、《子どもの見本、鏡となるための学び》であると解釈した。

クラスター 2 では、子どもを早期教育に駆り立てる「他の母親たち」に対しては、みんながやるからって、子どもをあちらこちらの塾に行かせる母親たちで、「自分の考え」がないと疑問に感じている。そして、子どもの交友関係を通じて知り合った母親たちには、いい姿だけを見せるようにして、「一緒に笑う程度」の相手だと割り切っている。他方で、母親自身の「友人」とは心の奥底の話ができ、話し合っているうちに共感を得ることが多い、と語っている。そこでクラスター 2 は、《子どもを通じての母親同士の表面的交流と友人との共感的理解》と解釈した。

4. 総合的考察

本研究の目的は、PAC 分析を用いて韓国人母親の育児ネットワークの機能を明らかにし、その機能の通文化性を検討することであった。以下では、本研究で得られた結果と考察を振り返りながら、日本人母親の育児ネットワークの機能（金，2007a）と照らし合わせて、総合的に考察する（Table 2 参照）。

第 1 に、対象者 A の場合、クラスター 1 をみると、子どもの世話に関する上半分と、夫と夫の親からなる下の部分の両方を繋ぐのが、「あなただけを信じる」であり、それがクラスター 2 の「料理人の役割」と結びついている。クラスターの結節状況から、「あなただけを信じる」は、全体を代表する重要な項目であると考えられ、対象者 A は、**育児ネットワークの構成員から期待される母親役割**が顕在化された事例として、金（2007a）での『規範機能』に該当すると言えよう。

第2に、対象者Bの場合、クラスター1とクラスター2を結節する項目は、「申し訳ない」と「早期教育」である。つまり、クラスター1の自分が理想とする子どもへの接し方とその裏面で感じる子どもへの申し訳なさ、クラスター2の社会的風潮である早期教育に付いて行かざるを得ないとの思いが結合しており、他の母親たちを比較対象（準拠枠）とした際にわき上がる対象者Bの複合的な心情を反映していると考えられる。また、対象者Cの場合、クラスター1をみると、母親としての自身の理想を表す前半と、現実には具体的にどうしたらよいかわからず迷い、揺れ動く気持ちを表す後半を繋ぐのが「いろいろ至らないところが多い」であり、それが最終的にクラスター2の早期教育に熱心な「近所の人」と結節している。そこで、クラスター1の自身の理想と現実場面での逡巡と、クラスター2の早期教育へ駆り立てる人々との繋ぎ目にある「いろいろ至らないところが多い」は、対象者Cの心情の中核を表す項目であると考えられる。これら2つの事例では、**育児ネットワークの構成員との比較が自身の母親役割への評価**につながることから、金（2007a）での『**比較機能**』に該当すると言えよう。

第3に、対象者Dの場合、クラスター1の周りからの具体的な「助言」が、クラスター2の共感的理解が得られる「友人との会話」と最終結合しており、この両項目は対象者Dの心情を表す重要項目であると考えられる。すなわち、対象者Dは、母親役割に対して**育児ネットワークの構成員からの助言といった具体的な支援と、共感的理解といった情緒的支援**が得られた事例と考えられ、これは金（2007a）での『**支援機能**』に該当すると言えよう。

以上のことから、育児ネットワークは、日本のみならず韓国においても、支援機能のほかに規範機能と比較機能を有すること、すなわち支援、規範、比較の3つの機能が通文化的に実在することを実証できたと言えよう。しかし他方で、育児ネットワークの各機能がどのような母親役割に働きかけているかをみると、次のような特徴が浮かんでくる。

金（2007b）は、育児期の母親役割行動として、「受容・共感的な関わり」「早期教育への働きかけ」「身辺自立への促し」「公共・食事のマナー遵守への注意」「子どもの人間関係への側面援助」「食生活への配慮」の6つの側面を見いだしている。これら6つの側面を韓国人対象者4人の連想項目とクラスターの意味づけに当てはめると、Table 2に示すように、規範機能、比較機能が「受容・共感的な関わり」（対象者Aの「**頭ごなしに子どもに怒ったり、感情的になったりして、子どもを悲しませたくありません**」、対象者Bの「**無条件にやさしくしてあげないから、子どもたちに申し訳ないと思うところがあります**」、対象者Cの「**母親が感情表現できる環境を作ってあげなかったからじゃないかって、心が苦しくなりますね**」）と「早期教育への働きかけ」（対象者Aの「**夫は、子どもたちにいろいろ教えてあげてを求めているようで**」、対象者Bの「**子どもの教育問題が悩みの種です**」、対象者Cの「**そのことで真剣に悩んでいます。周りに比較材料がたくさんあ**

るわけなんで」)に関連していることがわかる。

Table2 各対象者における育児ネットワーク機能と母親役割行動

		対 象 者			
		A	B	C	D
機 能	支援				○
	規範	○			
	比較		○	○	
母 親 役 割 行 動	受容・共感的な関わり	○	◎	◎	
	早期教育への働きかけ	◎	◎	◎	
	身辺自立への促し	◎			
	公共・食事のマナー遵守への注意				
	子どもの人間関係への側面援助			◎	
	食生活への配慮	◎			○

注：連想項目から抽出できたものに◎を付し、連想項目では示されなかったが、各クラスターの意味づけから抽出できたものに○を付した。

育児ネットワークの規範機能、比較機能と「早期教育への働きかけ」との関連は、日本人母親を対象にした金（2007a）では見られなかったことであり、韓国社会の文化的特徴を反映するものとして考えられる。金（2009）は、日本人母親は子どもへの発達期待として、他者と調和し、集団生活に適応的に行動することを重視するが、韓国人母親はことばや数字などの学習スキルを覚えることを重視していることを指摘している。韓国では、子どもに高学歴を得させることが母親の役目という価値観が強く（金，2003）、幼児期から学習塾、英会話教室、算数教室などに通わせることが圧倒的に多い（アン，2003）。このような学歴や発達期待をめぐる文化的価値づけが、育児ネットワークの機能と母親役割行動をつなぐ過程で開示されたと解釈できよう。

最後に、本研究は金（2007a）に続き、PAC分析による個別の事例を通じて、韓国人母親の育児ネットワークの機能を明らかにした。今後はこれらの結果に加え、日韓で質問紙法による量的調査を行い、両国の育児ネットワークの機能をさらに多面的に捉えていくことが必要であろう。

引用文献

- アン ジョン, “幼児期の子どもにおける早期教育の実態と母親の子育て観および育児ストレスとの関係”, 『大韓家政学会誌』, 41, 2003, pp.95-112 (韓国語)
- 陳 省仁・高橋義信, “親子関係の比較文化的研究—日米乳児の親子関係を中心として—”, 『心理学評論』, 31, 1988, pp.101-111
- 永久ひさ子, “成人期・老年期における発達研究の動向”, 『教育心理学年報』, 49, 2010, pp.67-76
- 内藤哲雄, 『PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待』, 京都, ナカニシヤ出版, 1997
- 内藤哲雄, 『PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待 (改訂版)』, 京都, ナ

カニシヤ出版, 2002

落合美恵子,『近代家族とフェミニズム』, 東京, 勁草書房, 1989

金 娟鏡, “日韓の母親における「子育て観」の因子分析的研究”,『応用心理学研究』, 29, 1, 2003, pp.17-26

金 娟鏡, “母親を取り巻く「育児ネットワーク」の機能に関する PAC (Personal Attitude Construct) 分析”,『保育学研究』, 45, 2, 2007a, pp.47-57

金 娟鏡, “就業形態、学歴と子育て観が母親役割行動に及ぼす影響—幼児の母親を対象にした日韓比較—”,『家庭教育研究所紀要』, 29, 2007b, pp.29-37

金 娟鏡, “日韓の母親の教育観について—就学前教育として何が重要か—”,『日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集』, 2009, p.466

金 娟鏡, “母親を取り巻く「育児ネットワーク」の構成員に関する日韓比較—非定型自由記述法を用いて—”,『帝京平成大学紀要』, 22, 1, 2011, pp.119-127

塘 利枝子・木村 敦, “小学校教科書に反映された子どもに期待される対処的対人関係—「東洋」対「西洋」の対比は妥当か—”,『平安女学院大学研究年報』, 1, 2000, pp.95-109

注

本論文の一部は、国際幼児教育学会第 32 回大会（2011）にて発表されました。

謝辞

本論文の作成に当たり、ご指導くださいました PAC 分析の開発者である内藤哲雄先生（福島学院大学 臨床心理学研究科教授）に、この場を借りてお礼申し上げます。また、調査にご協力くださいました 4 人の韓国人母親に感謝申し上げます。